

平等な社会を実現するためにできることを
国連のスピーチで発表するとしたらどんなことを話すか

僕たち、私たちの未来のために取り組むべきこととは？
～身近な情報格差について考える～

チーム名：Nagasaki Global Junior Innovators Team A

宍 那明（さこ ともあき） : 課題、提案、最後に

才津 琳太郎（さいつ りんたろう） : 現状、GIGA スクール構想、調査、総括

中尾 結（なかお ゆい） : きっかけ、現状

きっかけ

今年の6月、私たちの学校では1人1台のPC端末が生徒全員に配布された。

PC 端末を用いた学習はとても便利で、今後より学びが豊かになると期待される。

そして先日、生徒総会が開催され、『みんなが笑顔になるために ～GIGA スクール構想と向き合う～』という議題のもと、PC 活用の在り方について全員で意見を出し合った。

しかし、近年になって私たちは「情報格差(デジタルデバインド)」という言葉が頻繁に耳にするようになったと感じている。では、情報格差とはどのような状況で生まれるのだろうか。そして、情報格差が生まれることの何が問題なのだろうか。



現状

今の社会の「情報格差」とはどのようなものがあるのでしょうか？
調べていくと、「情報格差」は3つに分類できることがわかりました。

1、国際間のデジタルディバイド

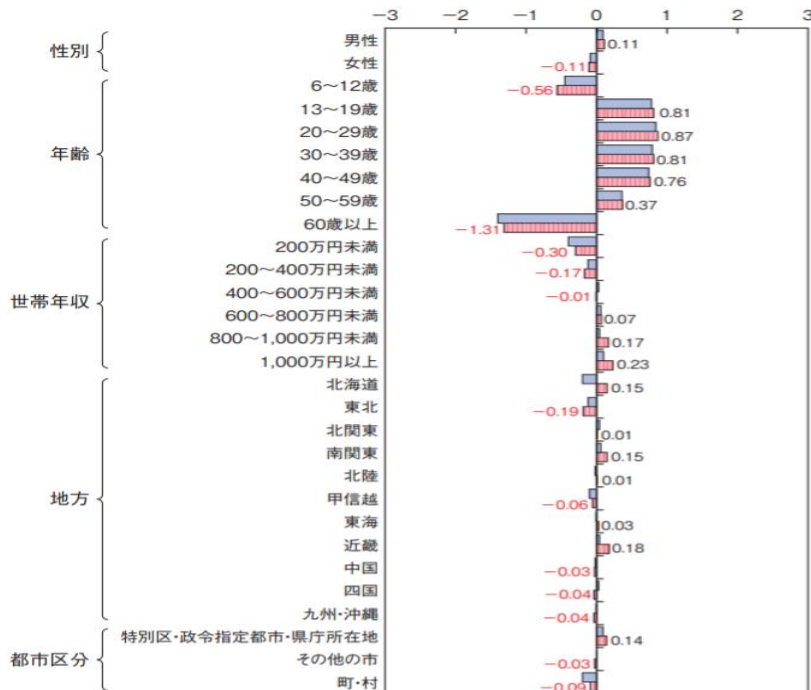
国際間デジタルディバイドとは、先進国や開発途上国などにおける国ごとの情報格差のこと。コストや情勢といった要因で基本的なインフラが整っていない開発途上国では、技術発展が進んでいる先進国と比べて、情報機器・インターネットの普及、ITに関わる人材の確保、使用方法の教育などの様々な面で遅れを取っており、情報通信技術を使用する環境が十分に整っていない

2、地域間のデジタルディバイド

地域間デジタルディバイドとは、国内の都市部と地方部といった地域ごとの情報格差のこと。とくに過疎化が進んでいる地域では、電話回線やインターネット通信などのICTインフラが充実していない傾向があり、インフラが整っている都市部との情報格差が生まれてしまっている。

3、個人間・集団間のデジタルディバイド

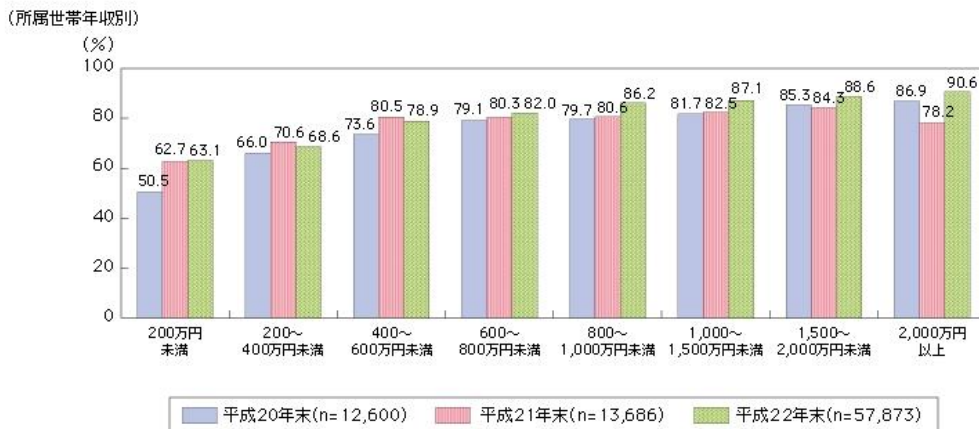
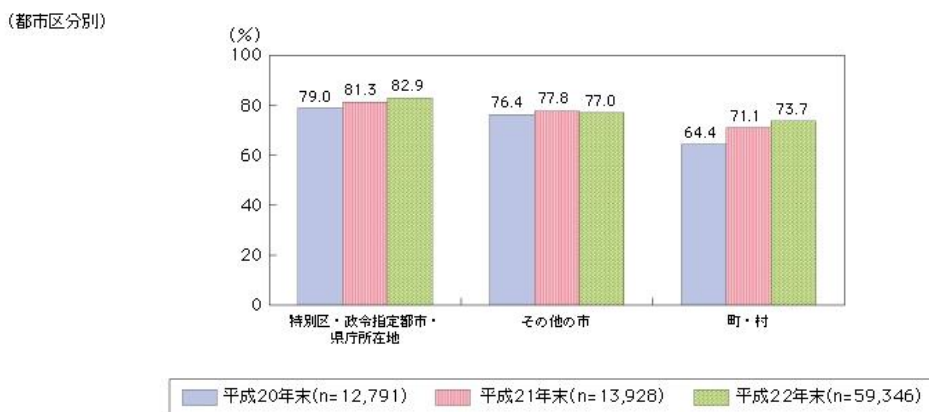
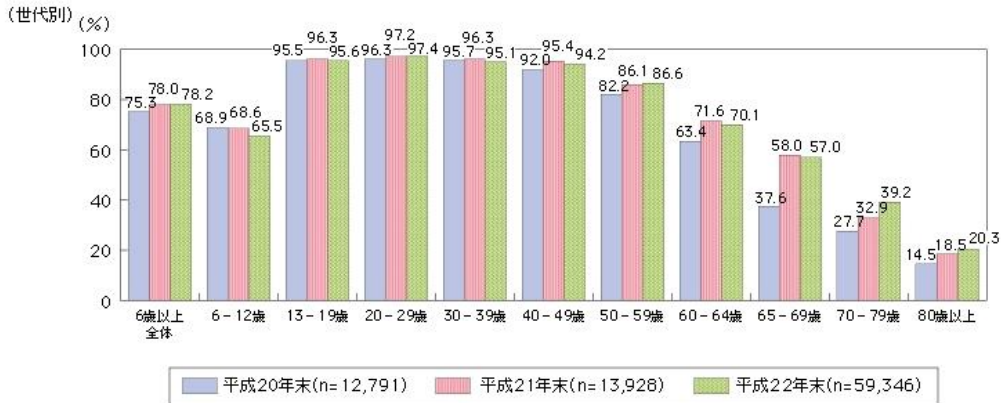
個人間・集団間デジタルディバイドとは、個人の年齢や障害の有無、学歴、所得によって生まれる情報格差のこと。一部の富裕層や都市部に住む人や年齢の若い人ほどICTリテラシーが高い傾向にあり、これにより情報格差が生れてしまっている。



総務省平成22年度より引用

このグラフからインターネットの利用・未利用に最も大きな影響を与えているのは、年齢ついで年収であることがわかる。

属性別インターネット利用調査



平成22年総務省「通信利用動向調査」より

このグラフからもインターネットの利用状況に年齢、年収が大きな影響を与えていることがわかる。また世代別インターネット利用調査のグラフでは6~12歳はH21からH22にかけて数値が下がっているが、80歳以上は3年連続で上昇している。これは高齢者へのサポートが多くあるが子供へのサポートが少ないことを表しているのではないかと考えた。6~12歳が僅かな減少傾向にあるのは将来のことを考えると大きな問題ではないだろうか。

GIGA スクール構想とは？

私達の学校を含め多くの学校に PC を配布させるきっかけとなった GIGA スクール構想。その実現のために私達は何をすべきなのか。それを考えるために GIGA スクール構想について調べてみました。

GIGA スクール構想

1人1台端末と高速通信環境の整備をベースとして society5.0 を生きる子どもたちのために「個別最適化され創造性を育む教育」を実現させる施策である



<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/ab1/20201125/shiryou2.pdf> より引用

GIGA スクール構想が目指すもの

1. 1人1台端末によって可能になるデジタルコンテンツを生かし、デジタル教科書・教材などを整備していく。
2. 各教科で、どんな授業を進めるか ICT を効果的に活用した学習活動のガイドラインを用意する。
3. AIドリルなどを作成し、授業のすみずみに先端技術を活用した環境を整備する。

私達はどう行動するべきなのだろうか

調査

身の回りにある情報格差について級友に聞いてみました。

Q1

日常生活を送る中で情報格差を感じることは、または、様々なことでパソコンを使うことが増えている中で不安に思うことはありますか？

(Aさん) 自分はパソコンを扱うのは得意なのですか、グループ作業などでは使うのが得意な人とそうではない人の差を感じることはよくあります。

(Bさん) 急に授業でもパソコンを使うようになって調べものくらいなら人並にできるのですが今後、様々なことでパソコンを使うようになっていくとなると少し不安です。

(Cさん) 自分はパソコンは苦手なので、これから先授業でパソコンを使う機会が増えていくとみんなより勉強の進みが遅くなるかもしれないので怖いです。

(Dさん) パソコンの使い方は先生が教えてくれるのである程度できるのですが、自分が操作したときに、パソコンの中でどのような処理が行われているのかが自分ではわからないことがあるので、不安に思うことは多くあります。

Q2

将来的に大学入試などでもコンピューターテスト形式が取り入れられるかもしれないのこのですが？

(Dさん) 以前英検の CBT(コンピューターを使った試験のこと)を受けたことがあります。

操作は難しくはありませんでしたがもし、自分がタイピングが苦手だったとしたらライティン

グ試験で消費する時間がもっと多くなっていたと思います。将来的に大学入試などで CBT しか受験方法がなくなるとしたらタイピングが速い人・遅い人などで学力以外にも差が出ると思います。

総括

上記以外にもいくつか質問してみましたが、その上で感じたことは格差を抱えている人ほどたくさんの問題点(身の回りに潜む情報格差)について気づいているということです。

今回の調査を通して格差を見つける・埋めていくには格差を抱えてない人達の想像ではなく格差の当事者の意見、考えを聞いた上で行動することが大切だと思いました。

確かに、格差を埋めるのと平等な社会を実現するのは違いますが、何かの差を埋めるという面では同じことだと思います。つまり、これは平等な社会を実現する上でも大切にすべきことではないでしょうか。

見えてきた課題

やはり、多くの生徒が時代の進む速さを感じるとともに、自分たちの技術が追い付いているか不安に感じていたのだろう。

私たちが今回の課題に取り組み始めたとき、今 PC が一人一台配られているからみんな平等に機器に触れることができる。だから、使えるか使えないかは勉強次第ではないかと話した。しかし、現状を調べていたり、調査を行ったりしたことで経済的な問題や教育の機会などでどうしても生まれる格差があることを知った。そこで私たちは格差には二種類あるのではないかと考えた。それは「望んで生まれた差」と「望まずに生まれた差」だ。「望んで生まれた差」は意識、努力などの個人の要因で生まれるもので、「望まずに生まれた差」は地域、人など周りの環境に影響を受けてしまい生まれるものである。私たちは、この「望まずに生まれた差」こそがあってはならない不平等だと考えた。

私たちが不安を感じるのは、都心の同学年やさらに下の学年の子より技術的な面で劣っていることと、それらが今でもこれからはより重要性を増していくということ理解しているからだ。つまり、情報格差は私たちの言う「望まずに生まれた差」だと言える。

私たちはいつ縮まるかわからない技術的な差を抱えている。もしこのままこの差がなくならなかつたら将来就職や受験同じスタートライン立てないかもしれない。生まれた環境で将来が決まってしまう、そんな未来にはなって欲しくない。そんな人たちは一人もいなくなっ欲しい。

今、PCなどのことについて学ぶことができる技術の授業量は主要五科目教科に比べて当然少なくなっている。しかし、ICTの役割が大きくなっていくこの社会でこのままで本当に

いいのだろうか。これからの時代を生きる子供たちに格差が生まれているこの現状のまま
で平等な社会の実現と、誰一人取り残さないという目標の達成はあり得るのだろうか。

提案

経済能力などの周囲の環境によって格差が生まれているのだから、今回の提案は、誰もが
受けることができる、全く等しいとは言えぬまでも、できるだけ近い環境でPCなどの機
器に触れて欲しい。そのような提案にしようと思う。今、一人一台PCが配られたので、物
資的な面は平等になったといえる。だから、次はみんながPCの扱い方などについて考え
る機会が増えるように動いて欲しい。

そこで、まず少し前に英語の学習指導要領が増えたように技術科のPCの授業量を増や
してみるはどうだろうか。義務教育の範囲内で誰でも受けることができる。授業量が増える
のだから必然的に技術力は向上するだろう。しかし、私たちが格差を知るきっかけになっ
たのがPCを使用した際の「使える」「使えない」差を学校で感じたことだ。今のまま単に授
業時間を増やすだけだと差を感じる機会も増えて行ってしまう。だから、教える先生方には
本当に少しずつ初歩的なことから始めて欲しい。調査の中の意見でもあったように、PC上
で何が起きているか分からないという人もいて、「〇〇のボタンを押して」のような説明では
応用が効かないので、ソフトの説明や基本的な操作などから丁寧に教えるべきだと思う。

次に、ハイレベルなPCの活用に適用していくため、ICT教育に詳しい方に学校に来ても
らい講演会や説明会(リモートも可)などをして、最新ICTの教育をしてもらうのはどうだろ
うか。環境の差と言えば、地域の格差と経済的な格差があると思うが、通常ならお金を支払

って参加する講演会なども学校で行うことで参加しやすく平等である。また、地域が違って
も進んだ教育を受けられる点は他の教科でもいうことができる利点だ。

最後に、そういった関係のイベントも地域に関係なく増やしてほしい。そうすることで、地
域全体での意識の向上につながるだろう。参加できる人に限りはあるが、そういった機会
が増えること自体には賛成だ。

最後に

今回テーマが平等な社会の実現だったため、身近な学校の問題として情報格差を取り上
げた。しかし、子供たちの中にはICTはおろか、通常の義務教育すら十分に行えていない
人がいるのが事実だ。私たちは情報格差の問題に取り組んだことで、自分たちの周囲で
起こっている重大な問題をもう一度振り返ることができた。そして、彼ら、彼女らの抱える
不安や、自分たちの力だけではどうしようのできないことがある現実を少しだけ理解するこ
とができた。彼ら、彼女らもまた「望まない」現状を突きつけられている。この問題に取り組
む人たちは、そのような人たちをデータ上だけで〇〇パーセントの人と呼び、増えたとか減
ったとか話している。私たちも初めはそうだった。しかし、今は「パーセントでは話をしな
いでください。」例え一人だとしても、「一人もいるじゃないですか。と言いたい。」私たちが生
きる未来は子供たち全員が望んだ道を歩ける未来になっていて欲しい。

引用

総務省「平成22年通信動向調査」

総務省「平成22年通信利用動向調査」

<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/ab1/20201125/shiryou2.pdf>